



青少年作文コンクール入賞者

心に残った出来事や、私を変えた一言など、自由なテーマで作文を募集したところ、323人から応募があり、次の皆さんが入賞しました（敬称略）。
☎ 生涯学習課（☎62-1036）

【最優秀賞】 1人

「希望の芽」

藤本あゆみ

【優秀賞】 10人

「自分に負けるな」

田島里穂（日高小4年）

「わたしの家のボランティア」

横井沙耶（富士松東小4年）

「メジロから見る環境」

長尾龍之介（住吉小6年）

「ぼくが今熱中している事」

野々山温人（住吉小6年）

「性別の考え方と夢」

加藤里奈（富士松中1年）

「限界を決めるな」

木船結衣（朝日中2年）

「命の重さと生きる重さ」

牧原ゆう（朝日中2年）

「今までと違う日々」

水野きらら（朝日中2年）

「世界の一人として」

安岡侑輝（刈谷東中3年）

「三ヶ月での成長」

中池由揮（株シエイトクト高等学園）

最優秀賞 「希望の芽」 藤本あゆみ

オリンピック・パラリンピックを見ていた。夢を手にした時の姿は本当に美しい。虐待・貧困・紛争・差別：世界では本当に様々な境遇の若者がいる。そんな若者達にも平等に降り注ぐ夢の輝きのように見えるのだ。

オリンピックが始まる数日前、ある特集を見た。一九六四年、国立競技場で東京オリンピック開会式を見ていた女性は、ほんの二十一年前、ここで学徒出陣の兵隊が同じように行進し戦場へ向かう姿も見ていた。彼らを見送る大勢の姿、皆バンザイと声を上げながら泣いている。女性は目の前を行進する若い希望にその学徒兵の姿を重ね、あの日の恐ろしさと同時に今日の美しさを未来へつなげたいと平和への願いを記していた。

なんとも心が震えた。一九六四年のオリンピックは戦後間もない。インパール作戦の数少ない生還者である監督や家族を亡くした選手もいたと言う。戦後の傷跡が残る中、多くのメダルを勝ち取った。テレビの前に皆が集い、がんばれ負けるなど応援する姿が映る。ただがむしゃらに生きてきた戦後の世の中にどれだけの希望を振りまいてくれたか。爆弾も銃も積んでいないブルーインパルスが描く五色の輪をどんな思いで見上げていたか。

今、私達は戦争を知らない。有り余る物や食べ物に囲まれながらも不満は溢れ、世界では紛争や虐殺、人種差別が繰り返される。そんな中で世界中が集い、人種、国、宗教に支配されず、あらゆる差別や障害を超えてスポーツを競い合い、讃えあう。この戦

いは人の命を奪わない。戦争を知らない若者に託す平和の祭典だ。これからの担う若者が「ゆとり世代」「さとり世代」と評される中で、彼らの創る希望は本当に眩しく、美しい。ギリシャ神話にパンドラの箱の話がある。パンドラの箱を開けると、妬み、嫉み、病気、恨み、裏切り：ありとあらゆる不幸が飛び出していく。しかし、飛び出していった箱の中から「まだ私がいまよ」と声が聞こえる。あなたは誰？「私の名前は希望です」箱の中に残っていたものは希望だった。

開催中、拡大を続けるウイルスも、国民のジレンマや葛藤もまるで箱から出てくる厄災のようだ。しかしきつと、いや確実に希望の音が聞こえるだろう。そして私にも希望の音が聞こえている。希望は夢を掴む。その夢は子供が抱き、憧れ、時には失望しながらも決して消えない目印となり、歩き出す力を生む。その力はまた新たな希望と夢を生むだろう。「人生で最も偉大な栄光は転ばずにいることではない。転んでも何度でも立ち上がることだ」という名言がある。私はそれをテレビ越しに切々と感じる。転んでもいいのだ。そこから起き上がる姿を私は見たいのだと。

様々な障害や困難があっても、誰かの心に残る希望に私は賭けたい。心に残る感動はいつの時代もきつと希望を育ててくれると私は信じている。

